

予言の成功と奇跡論法

工藤怜之 (Satoshi Kudo)

東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会特別研究員 DC

科学的实在論の論拠として、奇跡論法と呼ばれるものが有力と考えられてきた。奇跡論法の着想は、ヒラリー・パトナムの「实在論は科学の成功を奇跡にしない唯一の哲学である」という言葉に溯るとされている。大きな経験的成功を収めてきた現在の科学理論が、もし近似的にすら真でなく、その措定する理論的対象が实在しないとしたら、その成功は奇跡としか言いようがないのではないか。奇跡論法には、我々の直観に訴えるところが確かにある。

ところが、これに対して重要な批判を提起したのがラリー・ラウダンである。ラウダンによれば、過去に一定の成功を収めていながら、現在では近似的にすら真でないとみなされている理論は山ほどある。仮にそれらの成功にも説明が与えられるとすれば、それは真理性に訴えたものではありえない。したがって、实在論だけが科学の成功を説明できるとは言えないし、さらには、現在の（誤りとはみなされていない）理論の成功も、真理性を仮定せずに同様に説明できるかもしれない。

以上の批判に対して实在論者からは、ラウダンは理論の成功の基準を低く設定しすぎている、と応答できる可能性がある。ラウダンの挙げる、「成功」したが誤っていた理論は、実は大した成功を収めておらず、その程度の「成功」であれば近似的真理性を仮定せずとも説明できて然るべきである。近似的真理性を推論するに足るのは、一定の高い水準で成功した理論だけなのである。

では、实在論の立場からしか説明できない、高い水準の成功として何を考えればよいのだろうか。少なからぬ实在論者が新奇な予言の成否に注目する。観察される現象を単に帰結・説明するというだけでは、理論の成功としては十分でない。というのも、ある観察データが与えられているとき、それを収容する (accommodate) ように理論を構築・修正するだけならば、原理的には難しくないように思われるからである。それに対して、ある現象を説明するために作られた理論が、それとは異なる現象を予言すると判明し、それが的中した場合、その理論の真理性に対する我々の確信は著しく深まるように思われる。裏を返せば、近似的にすら真でない理論が新奇な予言に成功するようなことがあれば、それは奇跡としか言いようがないように思われる。このように、予言の成功と収容の成功を区別し、前者のみを奇跡論法の適用対象とするアイデアは直観的にもっともらしく、それだけに、反实在論からの批判をかわすためだけの恣意的な修正戦略と言い切ることもできない。

科学的实在論の一派として、新奇な予言の成功だけをその論拠とする立場を「予言实在論 (predictive realism)」と呼ぶことにしよう。予言实在論者は、収容の成功よりも予言の成功のほうが、理論の確証においてより重要であると主張していることになる。つまり、予言实在論は「予言優位論 (predictivism)」を含意する。ところが、この

予言優位論をめぐるのは、科学的实在論争とは別に論争が展開されてきた。理論の確証の度合いは、理論が経験的データとどれほどよく合っているかという点のみで決まる、と考えるのが自然なように思われる。あるいは、もう少し慎重に言えば、補助仮説のことも考慮に入れるべきかもしれないし、論者によっては、理論の単純さも確証に関与すると主張するかもしれない。いずれにしても、確証の度合いは理論と経験的データを見ればわかることであり、理論がどのように発見・構築されたかとは無関係なように思われる。すると、理論がデータを収容するために構築されたか、それとも、理論の構築後にデータが予言されたかは、理論の確証には関係がないことになる。つまり、予言優位論は、発見の文脈と正当化の文脈は別であるという直観に反するのである。予言優位論が何らかの形で擁護できない限り、予言实在論も正当化できない。

予言優位論を擁護しようとするこれまでの試みは、必ずしも成功してきたとは言えない。しかし、そのような試みからは、予言实在論がどのようにして擁護できるか（あるいは、擁護できないか）に関して、いくつかの重要な指摘・示唆を得ることができる。それを踏まえて、本発表では、なぜ予言の成功だけが实在論を擁護する（ように思われる）のか、なぜ实在論だけが予言の成功を説明できるのかについて、説明を与えることを試みる。まだ起こっていないことがこれから起こると予めわかる、という事態に説明を与えうる道具立てとして、我々は因果概念しか持っていないように思われる。すなわち、我々は、原因が正しくわかっているときに限り、それに対応する結果の生じることが予めわかる。逆に言うと、原因が正しくわかっていないのに予言が的中した場合、我々はそれを偶然・まぐれと呼ぶしかない。したがって、原因の存在を仮定して結果の予言に成功したとき、それでもなお原因に関して反实在論をとることは、予言の成功を説明のないままにすることにほかならない。その意味で、实在論こそが予言の成功を奇跡としない唯一の哲学なのである。